

本町館・館長谷口彰氏インタビュー

(聞き手：加藤りょう・石川寛之)

加藤：今日は上映会の観客の皆さんの反応も踏まえて、谷口さんの本町館への思いや他の成人映画館と比べた本町館の位置付けなどを伺えたらと思います。よろしくお願いします。

谷口：まあ、答えられる範囲であれば。

加藤：まず本町館についてですが、戦前は芝居小屋、それから戦後再開館というかたちで、当初は松竹、東映など5社の映画を上映していました。そして映画業界の斜陽化に伴いロマンポルノを上演するようになり、80年代あたりからピンク映画を流す成人映画館になった、ということでしょうか。

谷口：芝居小屋は私のところの経営ではありませんでした。私が聞いているのは〔経営を始めたのは〕映画館になってからで、親族のおじいさんがやりだしたので詳しくはわかりませんが、芝居小屋のときは経営者が違う。ウィキペディアなんかでは芝居小屋から買い取ったってなってるんやけど、映画館から買い取ったような感じで聞いてるんよね。でその後うちんところが東映各社さん、一般映画をやりだして…。当時やったら二番館三番館とかいう流れがあったので、遅れて上映する一般映画をしていたと。私が8歳か10歳ぐらいから成人映画館に変わったと思うんです。

加藤：それは、70年代後半のことですか？

谷口：そうやね、私が62年〔生まれ〕やから、70年代の前半ぐらいかな。

加藤：ロマンポルノ（註1）が始まってすぐ上映をやっていたと……。

谷口：やってたんじゃないかと。当時私も小さいからそのへんのことわかってないんですよ。その当時そんなに映画に興味もないし、何をやっているかっていう、まだ小学校やったからね(笑)。

私が記憶にあるのは、夏休みとか春休みは漫画映画（註2）をやっていたりしてたよね。いうのもやっぱ「漫画」なんで自分も観るし、お手伝いもしてて。やっぱこの辺で

は子供が多かったんで、友達が来たりするのもあったから、そのときだけお手伝いしたけど、普段は手伝うこともなく。

加藤：今からみると、ロマンポルノを上映しているような映画館に子供を連れて行くのは、ちょっと意外です。

谷口：その当時私も小さかったこともあって、違和感は感じなかったんですよ、やはり当時はまだ映画館も栄えてる時代やったので。今言ったように、二番館三番館の時代やったと思うんです。二番館三番館のいいところを言えば、東映、松竹、東宝さん、封切館で各映画、「漫画」出しますよね、その当時は。東宝やったらゴジラとか、東映さんとかやったら今度、ガメラをやると。これが二番館三番館やったら抱き合わせできるんですよ、両方一緒に。封切館は一本だけ上映。ゴジラやったらゴジラだけの上映。でも、遅れてやると、封切ってから半年以上になる。だから春になったら夏にうちらが上映できる、という時代です。そこで美味しいところ取りをね、遅れる分両方一緒に観れると、そして料金は一緒やと。いうやり方を父親の方はやってました。おじいさんは私が3歳かそこらで亡くなってるので、あまり記憶もないんですが、父親の経営的にはそういう具合にやってた。

夏やはは、街ビラ〔外にポスターを貼ること〕が利く時代だったので契約さしてもらって、家の軒先とか目立つところに貼らしてもらったり、看板を作って板張りを持って行ってそこに貼る、ということやってました。それも手伝いに行ったりはしました。

加藤：そうなんですね。当時は、「成人映画館」ではなかったかもしれませんが、お父さんの代から成人映画の上映をスタートさせたということですね。いろんな人から本町館の特色としてハッテン場ではなかったということを聞きました。それはお父さんの代からですか？

谷口：いや、そこはわかりません。私も入り出したんが20、22ぐらいからで、〔それまでは〕全く家のことに興味がなく、まず私が映画館を継続すると思ってなかったんです。そのころ私も京都にいなかったんでどういう具合にやってたかもわからんし。元々は1階も2階も客席やったんですけど、私が知ってる時代は1階が客席やったんですよ。1階で上映をして、2階はテナントにしました。

加藤：2階にはどんなテナントが入ってたんですか？

谷口：私の記憶では、表側にはスナックがあり、内側の方はゲームセンターみたいにして、ビリヤード台を置いたり。ゲームセンターゆっても昔のね、コインで遊ぶような何かがやってた記憶があるんですよ。今でこそなんですけど、表側にもテナントを貸して1階の映画館のときは角のそこね、あそこにラーメン屋さんをテナントして、たこ焼きもやってはったんで、「漫画」なんかのときは場内からも買えるようにしてた。カウンターだけの店ですけど居酒屋さんみたいなのもテナントとして貸してやってましたし。

さっきちょっと飛ばしましたけど、1階が映画館のときに、朝は映画上映し、昼1時から夕方まで演劇をし、夜はまた映画をするっていうことも父親はやってました。やっぱ興行師なのかね、商才はあったのか、考えはすごかったんだと思います。

石川：2階建ての2階で上映するという今の形式になったのはいつ頃からですか？

谷口：私がお阪にいるときだから、たぶん1980年ぐらいからかと思うんです。帰ってきたらもう変わってたんでね。もともと1階はガレージで、2階は映画館でした。次帰ってきたら下がパチンコ屋さんになってました。それは父親の考えなんです。映画を観た人がパチンコに行く。パチンコで負けた人も映画を観にきてくれるという相乗効果を狙ってのテナントをやってたと思うんですよ。

加藤：そこから22歳ぐらいのときに、3代目の谷口さんが継ごうと思って働き出したということですか。

谷口：いや、一応継ぐとは言ったんですけど、まるまる全然畑違いの仕事をしてまして。ただ、今の妻いますよね。お恥ずかしい話ですが、出会って結婚したいと。でもお金がないと(笑)。だから、店を手伝うので結婚式を出してくれっていうのがきっかけでこの世界に入ったんですよ。だからあんまりね、胸張って言えることじゃないんですが……。それまでは全然映画にも興味なく、ただ、若い頃は映画視察証っていうのがあって。それを借りてどこの映画館も行けたので好きなときは観に行くという感じだけで、そこまで映画に関しての興味は私は全然なかったです。

加藤：どのようなきっかけで3代目として継ぐ決心をしたのですか？

谷口：映画館に入ると、時間が経たなかった。だからもう、かえってしんどかったから辞めたかったんやけど、これがまたね、親戚からの一言で頑張ろうと思ったんですね。私「^{あきら}彰」ていうんですけど、親戚のおばさんから「あきちゃんには無理や」と。

ちょっと長くなりますが、先代が映画館を5軒くらい持ってたらしいんです。で、亡くなったときに相続で皆に分けたんですよね、娘息子に。で、そのおばさんはその1館を潰してんの、そんなこと言われた。そう言われたら頑張ろってなって。それからですね。それともうひとつは、やはり、5館あったうちの最後の1館やったいうのが大きいですね。

加藤：そうなんですね。ちょっと最初に触れたことに戻ると、本町館がハッテン場ではなかったことをたくさんの人から伺っています。なぜ、ハッテン場にしなかったのでしょうか。

谷口：父親が亡くなってから私と母親がやるようになって、やはりいろいろ聞いてましても、京都はその当時成人映画館って何軒かあって、そういうのが嫌なお客さんがうちんとこ来てるという。ここは昔商店で、今は住宅街。私も元々ここに住んでます。やはり悪いイメージもつけないし、ハッテン場になると問題も多いんですよね。

はっきり言ってハッテン場にする方が利益は上がったと思います。でも、その当時はハッテン場が嫌で私のところに来てくれる常連さんがものすごい多い時代でした。映画をゆっくり観れないとか、いろんなことを聞きます。父親のときはわかりませんが、この常連さんを守りたいっていうのもあったので、ハッテン場やったらそちらへ行ってもろたらいいし、利益よりも常連さんを大事にしようかなっていうのが私の信念で一応やったんですけどね。

ハッテン場だと思って来る人もいて、やはりそのお客さんからクレームというか「ちょっと」と言われると、私は中へ入って注意しに行ったりしたことはありましたね。他のところはもうほったらかしいうたらおかしいですけどよっぽどでないときあまり口出しもしないですね。でも私はたまに場内入ってちょっと観察したり、あれやったら私が行って注意する。

当時やっぱアベックの人も結構来られますよね。こんな女性の前で言うのもあれやけど、中でいちゃつくこともあったら周りが〔集中出来なくなる〕。うちのところ

は映画を観るための場所を提供しているわけですよ。映画を楽しんでもらいたいと思っている。でもそういうのになったら映画じゃなくて、見る方が変わりますよね。本当に観にきた人は邪魔ですよ。またガチャガチャガチャされても映画を真剣に楽しめなくなる。

たまに書き込みなんかでも「うるさい」とか「ハゲ坊主」とか書かれていたみたいです。私はあんまり見ないけど、あったみたい。

加藤：今回、女装の客の方にもインタビューをしまして、谷口さんに質問したいことがあるとおっしゃっていました。いまのお話に関連してるんですけど、その方は本町館がハッテン場ではないのになんで私の入場が許されたんだろうと言っていました。

谷口：女装でもいいですかという問い合わせが来たことがあります。映画観るのに服装は関係ないです。女装やから観たらあかんっていうことはないですよ。その女装の方が真剣に映画観たいなら別に断る理由はないです。ただね、ここで徘徊されたり何かごちゃごちゃされると注意もしますし、再三注意して聞いてもらえない場合は出入りをお断りする場合があります。

加藤：そうなんですね。その方は、はじめて本町館にいったとき、自分を女性料金として扱ってくれたことを感謝していました。2回目以降は男性料金になってしまって、ちゃんとしてるなって感心する一方でやや寂しい気持ちもあるとおっしゃっていました。

谷口：ちょっとね、ひょっとしたら私じゃないかもわからないです。私はやっぱり女装の方であっても、わかる方は料金も一応男性でいただいていた。わからなかった場合は女性料金でもらってる場合はあったかと思うんです。でないと逆に失礼にあたるので。

石川：女性料金についてなんですが、谷口さんが館長になられたときからあったのですか。結構珍しいと思って。

谷口：私もわからないので申し訳ないですけど、父親のときもあったと思います。女性は学生料金と一緒にしていたと思います。私もやっぱりね、女性も安心して女性に来ていただきたい。映画館って特に女性から見たら「暗い」「怖い」とかいうイメージがあると思ったんで、もうちょっと開けたようにしたいなと。表にはあまりだせ

ないけどやっぱり女性も興味あると思ったんでね、そういう成人映画っていうものにね。だから、いやらしいて観るか、逆に言うたらロマンポルノなんて監督さんも脚本もすごいですし、しっかりしたものだし、別に女性が観て楽しんでもいい。

私ら小さい頃いうたら、あまり開かれた世界じゃなかったのね。最初の話に戻りますが、近所の人に顔さすと奥さんにね、「あっこの旦那さんが成人映画観に行っはったわ」とかってコソコソ言われる時代で。いまでこそそんな言われる時代じゃなくなりましたが。私が就いた頃いうたらある程度開けてきた時代であったので、女性にも観ていただいたり、女性だけの上映会とかやったことがあります。そういうのでイメージを払拭できたらなと思ったんですけど。

加藤：実際、どんな女性が来ていましたか？

谷口：女性ひとりっていうのがやはりなかなか来にくいですが、なかにはおられました。彼氏じゃなくて、男性の友達と一緒に来て。なんでわかるか言うたら、割り勘ではるから(笑)。あと、脚本勉強されてる方。自分の知り合いの脚本家を書いた作品とかいうので観に来られたり。ロマンポルノをやるとロマンポルノだけ観に来られる方もおられました。

加藤：その女性限定上映会を開催したのはいつ頃なんですか。

谷口：もう10年ぐらいになりますかね。たまたまこれもう京都の学生さんと知り合って、ちょっとここでイベントかなんかしたい言うから、ほんなら私も協力するよとかいう話をして。女性限定っていうかたちで2回ほどしたかな。

加藤：10年前にもう女性限定の上映会をやるのって結構先駆的ですよね。他の成人映画館は今でこそ女性専用席とか作ったりしてますが、時期としては早い試みだったんじゃないかなと思いました。

谷口：ご存知の太田いうスタッフもいて、こういうのもいいかなというのでやるようになったんですけどね。〔本町館で〕トークショーがあったのも、なかなか京都にいて関東みたいに〔女優や作り手と〕出会うこともないですから、そういう人の話聞くのもひとついいかなっていうので。これがハッテン場なら、なかなかしにくかったと思います。

加藤：なるほど。本町館のロビーに監督や女優のサインが並んでいますね。イベントは頻繁にやっていたんですか。

谷口：それもありますし、太田を訪ねてこっちに来てくださったときや、うちんところ撮影に使わして欲しい言われて来ていただいたとき、自分が出てるからいうことで観に来てくださった女優さんや監督さんしかあそこには飾ってないです。どっかでお会いしたからもらって飾ってとかいうのはなかったです。

加藤：女性の方以外にも学生にも来て欲しいというお考えはありました？

谷口：そうですね。年齢層は幅広いですよ。言うたら18歳以上。上はないですから。女性男性関係なく、歳いった女性の方でも高齢の方でも来ていただいていいです。来られるのはほとんどシルバーの方でしょ。そのシルバーの方っていうのは、のちのち体も不自由になってきたら足を運んでももらえない。

今の若い人はあんまり劇場に足運ばなくなってるじゃないですか。家庭用のプロジェクターもあったりするからそれで楽しむ時代ですやん。やっぱり学生さんに来ていただくことは、家にはない臨場感って、私らんとは言えるようなあれじゃないですけど、大きい画面で観てもらおう。これがまたよければ、また年齢が続いていきますからね。若い人が途絶えると、成人映画館ってそこで終わってくでしょ。

加藤：谷口さんが3代目として活動していた時期はアダルトビデオの登場であつたりと、観客の足が映画館から遠ざかった時代だったと思うんですね。お客さんが減っていくなかでどういう対策をとっていましたか。

谷口：さっきも言いましたように、京都市内でも成人映画館何軒かありました。ハッテン場の映画館などいろいろありますが、どっちかいうたら私んところなんか繁華街から外れた場所。で父親がやっぱし考えたのは、「特集」。当時は4本上映やったんです。それが3本上映になり、3本でも色合いの似た映画を。よそさんっていうのは、バラエティ、コメディタッチ、シリアスタイプとかバラバラの3本を〔上映していた〕。映画会社さんが番組を組んでるところが多かったんです。

でも2代目は映画会社さん任せじゃなくて自分とこで番組を組めた。それを映画会社に発注するというかたちをとっていた。場所の悪い本町館で来てもらいにくいっ

ていうのがあったから、観たい映画を集めようやないかと。SMもんやったらSM。3本したら1回で全部楽しめるわけですよ。

バラバラになったら観たない映画んとき1時間抜けないととかあるわけですよ。私ら1回入っていただくと再入場いうのやってなかったの、ずっと待ってないといけない。よそさんはそれをやってはるから、私んところは人妻もんやったら人妻もんを3本集めようやないかと。ほんなら人妻もんの映画が好きな方は3本全部観て帰れる、というかたちをしていました。

加藤：先日インタビューした女装の方も、本町館はプログラム編成が良いと、作品の選別もいいけど統一感があるのが何より良かったとおっしゃっていました。

谷口：ああ、ありがとうございます。当時はね、やはりそういうふうに分かれてたんです。ここ10年以上くらいのことですかね、普通の人妻もんやな思って撮ってたら緊縛が入ったりと、色分けしにくくなったのでただ題名で語呂合わせしていたことはありましたけどね。

加藤：どういうジャンルが人気だったんですか。

谷口：父親のときもそうでしたけど、やっぱり緊縛、SM。特に私んところでは団鬼六(註3)さんとか。やるところが少なかったんですよ。関西でもここらへんをやるいうたら何軒かしかなかったです。神戸の1館、大阪の1、2館あったぐらいですかね。私んところの映画館は、当時よく流行った痴漢電車(註4)は逆に入らなかった。ハード系が良かったのかソフト系が逆にあかんかったかもわからないですね。

加藤：浜野監督作品もハード系だと思いますが、本町館は浜野監督の作品を日本で一番上映してきた映画館と聞きます。

谷口：そうですね。やはりハードで、しっかりしているところもありますよね。浜野監督の映画はお客さんに来ていただける映画でした。

加藤：ちょっと話を変えて、最初に触れた近所の方への配慮や本町館周辺の人との交流について伺っていただきたいと思います。騒音が漏れないようにとか上映会のときも配慮されていましたが、ほかに何か近隣住民の方に迷惑にならないようにやっていたことはありますか？

谷口：おかげさまでそこまでのトラブルもなかったし、先ほども言いましたが一般映画の時代からやってるから。近所の方やったらタダで入れてあげたりなんか。近所の方は商売もしておられたからこの恩恵もあったと思うんですよ。だからある程度はもう理解してくださってたと思います。成人映画館になって近所から何か言われることもなかったですね。新しく住み着いた方であったかもわからんですけど。

あと、音が漏れなくするのは近所もそうですし、京都女子大ありますでしょ。ほんならね、やっぱり学生さん。この方たちはやっぱり学校のために近所のマンションとかアパートに住まれる。ほんならやっぱり喘ぎ声なんて漏れてたら女性の方って嫌ですよ。やっぱこっちも言われる前に一応できる限りのことはしたいね。言われてするんじゃない、自分もやっぱ嫌ですしね。

加藤：私が本町館に行ったとき、館長は観客の方とたくさん挨拶をされていたという印象があります。これまでも観客の方との交流はよくあったんですか？

谷口：ありましたね。何て言うんですかね、やっぱりいろいろお話をせてもらったこともありましたし、顔なじみになると特にまたお話なんかしますしね。うん。そうですね。

加藤：成人映画館に行くことを恥ずかしいと思っていた世代だったことと対照的で面白いなと思います。

谷口：入ってもうたら関係ないですね。逆に言えば、街中であつたら会釈はしますが、それ以上はしない。どっから来られてるというのも大雑把には、京都、大阪、何区ていうのは聞いても、詳しくどこらへんですかいうのは聞かないですね。だから極端に言えば落とし物。これは自分でも一応配慮してるのかな思うのは、お財布なんか落とされます。交番に届けます。こんどきに交番から電話されるときも、どこどこに落ちてましたってあんまり言わないでくださいと、警察に言います。本人ならまだ分かりますけど、奥さんがではあったらね。また揉めるでしょ。隠れて行ってることバレるのも嫌やと思うんでね。

加藤：そろそろお時間ですのでまとめの質問をさせていただきます。改めて谷口さんご自身は、成人映画館やそれを取り巻く文化に対して、今現在どういう気持ちを抱いているかお聞かせ願えたらなと思います。

谷口：かたちはどうあれ、人との出会いの場所でもありますよね。ハッテン場という意味じゃなく、お客さんと館主としてね。何時間居ても居れる数少なくなった娯楽ですよ。いま喫茶店でも1時間居るのは大変でしょ。私も仕事辞めて、行く場所がない。成人映画館って私も初め抵抗あって嫌でしたけど、妻もこんな世界初めてでしたから嫌だったと思いますけど、息子やろもどうかかわらないですけど、やはりこれで一応養ってきたので理解はしてもらえる……。成人映画ってどうなんだろうね、むつかしい……。

成人映画っていろんなジャンルがあってまた面白いのかなって思いますね。だから、一般映画なんかでもそうですけど、成人映画こそ、3本立てにしろ2本立てにしろ、こうやってバラエティに富んで番組が組めたり。今思い起こせばそうかな。楽しい時代もあったけどここ数年間はやっぱり厳しい時代、作品がなかったの。作品があればね、当時やったらね、新作でここにボンとぶつけてお客さん呼べる。ちょっと減ってきたらここにええのばかり集めて、お客さんにまた足を運んでもらって……。

これって「くせ」のもんなんですよ。言い方悪いですけど、娯楽っていうたらちょっと途切れると別になかっても必要ないんですよ。もう行き出したらやっぱ「くせ」でまた行こうかなと。でもコロナみたいに行かなくなると「もうええわ」ってなりますよね。

一般映画と違うのはそこなんです。一般映画は観たい映画がごまんとあるからいいね、だから毎月行くじゃないでしょ、観たい映画だけ行くでしょ。でも成人映画って行き出したら毎週のように行ったりとか、まあ言うたら例え悪いかもわかりませんが、パチンコなんかもそうです。でもやめたらもうずっと行かへんという感じかなと思います。

加藤・石川：ありがとうございました。

註

1) ロマンポルノ：日活ロマンポルノのこと。1971年-88年の間に日活で製作・公開された約1100本の成人映画を指す。「日活ロマンポルノとは」、日活ロマンポルノ公式サイト、<https://www.nikkatsu-romanporno.com/about/>（2026年4月26日最終閲覧）。詳細は菅野先生のトークを参照。

2) 漫画映画：アニメーション映画のこと。

3) 団鬼六：ディスカッション、註22を参照。

4) 痴漢電車：ピンク映画の定番ジャンルの一つ。山本晋也による「痴漢」シリーズのヒットを皮切りに、70年代以降の定番路線となる。しかし、コロナ禍や時代の価値観の変化から、2020年の『痴漢電車 夢見る桃色なすび』を最後に「最終電車」となった。2020年12月28日「お客様へのお知らせ」、…≡☆ オーピー映画公式WE B サイト ☆≡…、<http://www.okura-movie.co.jp/op/>（2026年4月23日最終閲覧）。「ピンク映画の歴史」、ピンクリボン 番外編～ピンク映画とは～、<https://www.uplink.co.jp/pinkribbon/bangai.html>（2026年4月26日最終閲覧）。